

『山海経』五蔵山経と『管子』

大野圭介

緒言

『山海経』の前半部分を占める五蔵山経は、南山経・西山経・北山経・東山経・中山経の五つの巻に分かれ、それぞれがさらに南山経・南次二経・南次三経、西山経・西次二経・西次三経・西次四経の如く細分され、各経は一連の山の名とともに、その山に産する動植物や鉱物の種類や、奇怪な動植物の特徴が記されている。また各巻の末尾には、その山系の神の名と、それを祀る際に用いる犠牲や玉の種類が記される。『山海経』の中では比較的良好よくまとまった内容を持ち、斉一な形式に則って書かれており、五蔵山経こそが『山海経』の最も基本的な部分とする見方は諸家とも一致する。

ではいかなる人、あるいは集団が『山海経』を著したのか。この問題は前野直彬氏が「よほど画期的な考古学的発見でもあれば別だが、恐らく、永遠のなぞとして残るであろう」と指摘する通りであるが、魯迅が「記海内外山川神祇異物及祭祀所宜、以爲禹益作者固非、而謂因《楚辭》而造者亦未是、所載祠神之物多用精（精米）、與巫術合、蓋古之巫書也、然秦漢人亦有增益。（海内・海外の神祇・異物や祭祀にふさわしい品を記しており、禹・益の作ったものとするのはもちろん誤りだが、『楚辭』によつて作ったものと言つのもまた正しくない。記載されている神を祀るための品物には多く精米が用いられ、巫術とも符合する。恐らく古えの巫の書物であつたが、秦漢の人が増補したところもあるであろう。」と断じてより、伊藤清司³・前野直彬⁴・松田稔⁵等の諸氏もみなこれを踏襲し、『山海経』を巫祝の手になる

ものとする見方が、研究者の間ではほぼ共通認識となつているといえる。

そもそも古代における巫祝は、呪術を行うとともに呪術的医療行為にも携わつてきたとされており、「醫」の異体字が「醫」であることも、医療と巫術の関係の深さを物語る。『山海経』の中でもとりわけ前半の五蔵山経五卷には、医薬に用いられたと見られる動植物や鉱物の記載が多く、また各卷の末尾に山岳祭祀の記載があることから、これを山川を跋涉して医薬を求める巫医の案内書とする見方が、今日に至るまで支配的になつているのである。

ところが五蔵山経を仔細に読むと、これを巫医の案内書と断ずるには躊躇せざるを得ないような記述もまた多いことに気づく。たとえば五蔵山経の最も典型的な筆法で書かれた一条をいま取り出してみると、

又西七十里、曰英山、其上多柎櫛、其陰多鐵、其陽多赤金。禹水出焉、北流注于招水、其中多鮮魚、其状如鼈、其音如羊。其陽多箭筈、其獸多牝牛・臧羊。有鳥焉、其状如鶉、黃身而赤喙、其名曰肥遺、食之已癘、可以殺蟲。

又た西七十里を、英山と曰い、其の上は柎・櫛多く、其の陰は鉄多く、其の陽は赤金多し。禹水こより出で、北流して招水に注ぎ、其の中は鮮魚多く、其の状は鼈の如く、其の音は羊の如し。其の陽は箭筈多く、其の獸は牝牛・臧羊多し。鳥有り、其の状は鶉の如く、黃身にして赤き喙、其の名を肥遺と曰い、之を食らえば癘いを已し、以て虫を殺すべし。(西山経7)

後半部の「有鳥焉」以下で説明される肥遺なる鳥は、服用すれば癘(疫病)が治り、虫を殺すこともできるという薬効が記される。ところがそれ以外の動植物や鉱物は、ただその名を挙げるだけで、何にどのように使えるのか説明は全くない。近年の出土資料の中には、古代医療に関する極めて実用的なマニュアルと見られるものも多く出土しているが、その代表的なものである馬王堆漢墓帛書『五十二病方』には

狂犬齧人、取恆石兩、以相靡𠵼、取其靡如麋者、以傳犬所齧者、已矣。

狂犬 人を齧めば、恆石兩つを取り、以て相い靡する𠵼(也)。其の靡りて麋この如き者を取り、以て犬の齧みし所に傳つくれば、已いゆ。の如く、病状に依じて用いる薬や処方の方が事細かに記される。これに記される病状は、他にも嬰兒の癩やひきつけ、ママシやヒルにかまれた場合など、ごくありふれた病気や怪我であつたと思われるものも少なくない。

これに比べると、五蔵山経の記述は、誰も見たことがないような奇怪な動植物に関しては説明が詳しいものの、巫医のためのマニュアル

としてはあまりにも不完全であるように見える。論者の中にもこの問題に言及する者はないわけではなく、たとえば大形徹氏は魯迅の見解に全面的に同意しながらも、祭祀にはつきものの呪文のたぐいが全く記されないことを指摘するが、「しかし、祭祀の際にかならず述べられる祝詞すら省略されたのか記されていない」と云うだけである⁷。また松田稔氏も五蔵山経の植物には名前のみで説明を加えないものや、薬効を記すものの割合が高いことを指摘し、これらの植物は決して怪奇なものばかりではなく日常性・現実性が高いものであるとし⁸、また鉱物についても、その形状や効能がほとんど説明されないことを指摘するが、その理由を巫祝にとってこれらの薬効はわざわざ説明する必要のないものだったからとしている⁹。しかし日常的な病気に関する療法も省略せず詳細に記す『五十二病方』の存在を考えれば、単純に「書くまでもないから省略した」と片付けるには不安が残る。

そもそも先に挙げた西山経の記述で、前半部分の「其上多柎櫨、其陰多鐵、其陽多赤金」のくだりのような情報を必要としたのは、果して巫医だけなのであろうか。五蔵山経ではこのような鉱産や植生に関する記述はほぼすべての条に記されており、しかも

又東五十里、曰師每之山、其陽多砥礪、其陰多青腹、其木多柏、多檀、多栢、其草多竹。

又た東五十里を、師毎の山と曰い、其の陽は砥礪多く、其の陰は青腹多く、其の木は柏多く、檀多く、栢多く、其の草は竹多し。（中次八経²²）

のような条を先入観なしに見れば、むしろ土木や手工業のための材用としての情報と受け取ることも、あながち不可能ではない。

かく考えると、五蔵山経を「巫祝のための書」とする従来の見方を一旦離れてみなければ、この書の本質は見えてこないのではなからうか。もちろん五蔵山経に記される内容が巫術と深く関係していること自体は疑いようのないことと思われる。しかし五蔵山経が雑多な内容を含み、さまざまな性格の書として考えられてきたことも、また事実である¹⁰。そこから巫術に関する記述だけを抜き出してみても、中国古代の巫術や民間医療の実態を知るには有用なことであるが、五蔵山経そのものの本質を探ることにはならないのではないか。雑多なものを含む全体を見ることによってこそ、それがなぜ五蔵山経という一つの書にまとまっているのかを考える手がかりが得られるのではないか。

本稿はこのような立場から、五蔵山経の記述の様式を分析することによって、その最も主要な部分が材用としての鉱産や動植物の分布にあることを示し、これを戦国期の経済思想や自然開発に関する記述が豊富な『管子』と比較することによって、その成立の事情を探る手が

かりを得ようとするものである。

一、物産分布表としての五蔵山経

五蔵山経の筆法は至って単調であり、ほとんどの条は一定の書式に則って書かれている。いま典型的な条を挙げると、

A 南山経之首曰鵠山、其首曰招搖之山、臨于西海之上、多桂、多金玉。有草焉、其状如韭而青華、其名曰祝餘、食之不飢。有木焉、其状如穀而黑理、其華四照、其名曰迷穀、佩之不迷。有獸焉、其状如禺而白耳、伏行人走、其名曰狴狴、食之善走。麗谿之水出焉、而西流注于海、其中多育沛、佩之無瘕疾。

南山経の首を鵠山と曰い、其の首を招搖の山と曰い、西海の上に臨み、桂多く、金玉多し。草有り、其の状は韭の如くして青き華、其の名を祝餘と曰い、之を食らえば飢えず。木有り、其の状は穀の如くして黒き理、其の華は四もに照り、其の名を迷穀と曰い、之を佩ぶれば迷わず。獸有り、其の状は禺の如くして白き耳、伏行して人のごとく走る、其の名を狴狴と曰い、之を食らえば善く走る。麗谿の水焉より出で、而して西流して海に注ぐ、其の中は育沛多く、之を佩ぶれば瘕疾無し。(南山経1)

B 又東三百里、曰堂庭之山、多棧木、多白猿、多水玉、多黄金。

又た東三百里を、堂庭の山と曰い、棧木多く、白猿多く、水玉多く、黄金多し。(南山経2)

C 又東四百里、曰亶爰之山、多水、無草木、不可以上。有獸焉、其状如狸而有鬣、其名曰類、自爲牝牡、食者不妒。

又た東四百里を、亶爰の山と曰い、水多く、草木無く、以て上るべからず。獸有り、其の状は狸の如くして鬣有り、其の名を類と曰い、自ずから牝牡を爲し、食らう者は妒まず。(南山経6)

D 又西二百里、曰龍首之山、其陽多黃金、其陰多鐵。苕水出焉、東南流注于涇水、其中多美玉。

又た西二百里を、龍首の山と曰い、其の陽は黄金多く、其の陰は鉄多し。苕水 焉より出で、東南流して涇水に注ぎ、其の中は美玉多し。
(西次二経6)

E 又西二百里、曰鹿臺之山、其上多白玉、其下多銀、其獸多牝牛・羴羊・白豪。有鳥焉、其状如雄雞而人面、名曰鳧僕、其鳴自叫也、見則有兵。
又た西二百里を、鹿台の山と曰い、其の上は白玉多く、其の下は銀多く、其の獸は牝牛・羴羊・白豪多し。鳥有り、其の状は雄雞の如くして人面、名づけて鳧僕と曰い、其の鳴くこと自ら叫ぶなり、見るれば則ち兵有り。(西次二経7)

F 又北三百里、曰神困之山、其上有文石、其下有白蛇、有飛蟲。黄水出焉、而東流注于洹。滏水出焉、而東流注于歐水。
又た北三百里を、神困の山と曰い、其の上に文石有り、其下に白蛇有り、飛虫有り。黄水 焉より出で、而して東流して洹えんに注ぐ。滏水 焉より出で、而して東流して歐水に注ぐ。(北次三経21)

G 又南四百里、曰高氏之山、其上多玉、其下多箴石。諸繩之水出焉、東流注于澤、其中多金玉。

又た南四百里を、高氏の山と曰い、其の上は玉多く、其の下は箴石多し。諸繩の水 焉より出で、東流して沢に注ぎ、其の中は金玉多し。
(東山経7)

以上の文の形式をパターン化してまとめると次のようになる。

A 山系の名 山の名 場所 多+動植物・鉱物 有○焉+形状・葉効 水源となる川の名 川の流れる方角・終点 其中多+動植物・鉱物 葉効

- B 前の山からの方角・里程 山の名 多+動植物・鉱物
- C 前の山からの方角・里程 山の名 多(無)+水・動植物・鉱物 「不可以上」 有○焉+形状・葉効
- D 前の山からの方角・里程 山の名 其陽(陰) 多+動植物・鉱物 水源となる川の名 川の流れる方角・終点 其中多+動植物・鉱物
- E 前の山からの方角・里程 山の名 其上(下) 多+動植物・鉱物 其獸多+動物 有○焉+形状・凶兆
- F 前の山からの方角・里程 山の名 其上(下) 有+動植物・鉱物 水源となる川の名 川の流れる方角・終点
- G 前の山からの方角・里程 山の名 其上(下) 多+動植物・鉱物 水源となる川の名 川の流れる方角・終点 其中多+動植物・鉱物

これを見ると、「多(有・無)+動植物・鉱物・水」という形で動植物・鉱物・水の存在(または不存在)を示す記述は、A〜Fのすべてに見られる。松田稔氏は五蔵山経の植物に関する記述を分析し、名称だけで全く説明を加えない甲型、「有○○」の後に説明を加える乙型、「有○焉」——。名曰○○」という形で、草があり、これこれの形状で、名を○○という、という説明のある丙型に分類した上で、うち甲型は既知の植物を言う形式であるのに対し、丙型はその多くに葉効の説明があり、乙型は両者を折衷した形式であることを指摘した¹⁾。奇怪な形状や葉効の説明があるものは、多くが松田氏の言う丙型であり、「多+動植物・鉱物」の後に説明が続く形は、五蔵山経全体で見ても少数であり、そのほとんどは水源となる川の名とその方角・終点の後に、「其中多+動物+説明」という形で続く。

これ以外の「多(有・無)+動植物・鉱物・水」の記述、即ち松田氏の言う甲型は、形状や葉効などの説明を付さず、ただその名を挙げて、存在を示すのみである。この形式の記述を欠く条は、たとえば

又東百八十里、曰小侯之山。明漳之水出焉、南流注于黄澤。有鳥焉、其状如鳥而白文、名曰鵠鷗、食之不瀆(郭云、不瞋目也)。

又た東百八十里を、小侯の山と曰う。明漳の水 焉より出で、南流して黄沢に注ぐ。鳥有り、其の状は鳥の如くして白き文、名づけて鵠鷗と曰い、之を食すれば瀆せず(郭云う、目を瞋まさせざるなり)。

(北次三経16)

の如く水源となる川を記していたり、

西次三經之首、曰崇吾之山、在河之南、北望冢遂、南望畚之澤、西望帝之搏獸之丘、東望螭淵。有木焉、員葉而白柎、赤華而黑理、其實如枳、食之宜子孫。有獸焉、其狀如禺而文臂、似豹虎而善投、名曰舉父。有鳥焉、其狀如鳧而一翼一目、相得乃飛、名曰蠻蠻、見則天下大水。

西次三經の首を、崇吾の山と曰い、河の南に在り、北に冢遂を望み、南に畚の沢を望み、西に帝の獸を搏つの丘を望み、東に螭淵を望む。木有り、員き葉にして白柎、赤き華にして黒き理、其の実は枳の如く、之を食すれば子孫に宜し。獸有り、其の状は禺の如くして文ある臂、豹虎に似て善く投じ、名づけて拳父と曰う。鳥有り、其の状は鳧の如くして一翼一目、相い得て乃ち飛ぶ、名づけて蛮蛮と曰い、見るれば則ち天下 大水あり。(西次三經1)

の如くその山から遠望できる地を記していたりしており、この両方を欠く条は

又西三百五十里、曰玉山、是西王母所居也。西王母其状如人、豹尾虎齒而善嘯、蓬髮戴勝、是司天之厲及五殘。有獸焉、其状如犬而豹文、其角如牛、其名曰狡、其音如吠犬、見則其國大穰。有鳥焉、其状如翟而赤、名曰胜遇、是食魚、其音如録、見則其國大水。

又た西三百五十里を、玉山と曰い、是れ西王母の居る所なり。西王母は其の状 人の如く、豹の尾・虎の齒にして善く嘯き、蓬髮にして勝を戴き、是れ天の厲及び五殘を司る。獸有り、其の状は犬の如くして豹の文、其の角は牛の如く、其の名を狡と曰い、其の音は犬の吠ゆるが如く、見るれば則ち其の国は大いに穰る。鳥有り、其の状は翟の如くして赤、名づけて胜遇と曰い、是れ魚を食し、其の音は録の如く、見るれば則ち其の国は大水あり。(西次三經11)

又西二百二十里、曰三危之山、三青鳥居之。是山也、廣員百里。其上有獸焉、其状如牛、白身四角、其豪如披蓑、其名曰傲徠、是食人。有鳥焉、一首而三身、其状如鸚、其名曰鵙。

又た西二百二十里を、三危の山と曰い、三青鳥 之に居る。是の山や、広員は百里。其の上に獸有り、其の状は牛の如く、白身にして四角、其の豪は蓑を披るが如く、其の名を傲徠と曰い、是れ人を食らう。鳥有り、一首にして三身、其の状は鸚の如く、其の名を鵙と曰う。(西次三經18)

又東七十里、曰脱扈之山。有草焉、其状如葵葉而赤華、莢實、實如椶菜、名曰植楮、可以已癩、食之不昧。

又た東七十里を、脱扈の山と曰う。草有り、其の状は葵葉の如くして赤き華、莢ある実、実は櫻莢の如く、名づけて植楮と曰い、以て瘰（病の一種）を已むべし、之を食すれば昧くらまず。（中山経6）

又東二百里、曰姑媯之山。帝女死焉、其名曰女尸、化爲菴草、其葉胥成、其華黄、其實如菟丘、服之媚于人。

又た東二百里を、姑媯の山と曰う。帝女 焉に死し、其の名を女尸と曰い、化して菴草と為り、其の葉は胥成し、其の華は黄、其の実は菟丘の如く、之を服すれば人に媚ぶ。（中次七経3）

又東二十里、曰苦山。有獸焉、名曰山膏、其状如逐、赤若丹火、善詈。其上有木焉、名曰黄棘、黄華而員葉、其實如蘭、服之不字。有草焉、員葉而無莖、赤華而不實、名曰無條、服之不瘦。

又た東二十里を、苦山と曰う。獸有り、名づけて山膏と曰い、其の状は逐の如く、赤きこと丹火の若く、善く詈る。其の上に木有り、名づけて黄棘と曰い、黄なる華にして員き葉、其の実は蘭の如く、之を服すれば字せず。草有り、員き葉にして莖無く、赤き華にして実らず、名づけて無条と曰い、之を服すれば瘦せず。（中次七経4）

又東南二十里、曰樂馬之山。有獸焉、其状如彘、赤如丹火、其名曰猴、見則其國大疫。

又た東南二十里を、樂馬の山と曰う。獸有り、其の状は彘の如く、赤きこと丹火の如く、其の名を猴と曰い、見るれば則ち其の国は大疫あり。（中次十一経21）

の六条を数えるのみである。しかもその中には西王母や三青鳥、帝女など、神話的な雰囲気濃厚な記述が目立ち、五蔵山経の中でも特に異質さを感じさせるものである。

以上を綜合すれば、五蔵山経の中核をなす最も主要な情報は、

前の山からの方角・里程十山の名

其上（下）多十動植物・鉱物

水源となる川の名十川の流れる方角・終点（十其中多十動植物・鉱物）

という形式で記される、山ごとの動植物・鉱物分布、河川の水源と経路、河川の産物に関する情報であるといえよう。

ではどのような必要があつて、かかる情報が集積されたのであろうか。それを考える手がかりとなる資料に、甘肅省天水市にある放馬灘一号秦墓から出土した地図がある。現在のところ中国最古とされるこの地図は、四枚の木板に計七面描かれており、これらはそこに記される地名を手がかりにつなぎ合わせる事ができる。それを見ると河川の水流が細い実線で描かれ、一部には道路と見られる細線も別に描かれていて、道や川の両側に黒い半円を二つ向い合わせて、狭い谷を示している。さらに谷の名と樹木の名も記され、それぞれの間の里程も書かれている。同時に出土した木簡の記述によれば、その墓主は統一前の秦で、殺人を犯して放馬灘に流刑になつた軍人であるといひ¹²。この地で行政を担当していた者と思われる。

この地図に描かれている森林分布や河川・道路・里程の情報は、五蔵山経の中核をなす部分の情報と明らかに似通つている。行政を行う者にとつて、森林資源は土木工事を行う上でも、材木として利用する上でも重要な情報だつたはずであり¹³、五蔵山経もまた行政に携わる人間にとつて有用なものであつたと思われるのである。後漢に至つても、王景が黄河の氾濫で決壊した汴渠の修復を命じられた際に、天子から『山海経・河渠書・禹貢圖及錢帛衣物』を賜わつたと云うのも¹⁴、『山海経』が土木工事に役立つ書物だという認識がなお残つていたからであらう。

もつとも放馬灘秦墓の墓主記木簡によれば、墓主の丹なる人は矢で人を射殺してしまい、棄市に処せられたが、三年後に蘇生したという奇怪な話が記されており¹⁵、墓からは地図の他に日書や巫医書も出土していることと考え合わせると、墓主は巫祝と全く無関係だつたわけでもなかつたようである。あるいは支配下に置いていた巫祝から山林に関する情報を得て、それをもとに地図を作成した可能性も考えられよう。

このように動植物・鉱物の分布や河川の経路が五蔵山経の中核をなす情報であり、行政側の人々にとつて有用な情報であることを見てきたが、山林資源を行政側で管理する政策は、実は『管子』の諸篇で盛んに説かれていることである。次章では『管子』の経済思想に関する記述を検討することによって、五蔵山経とのかかわりを探ることにしたい。

二、『管子』の経済思想と五蔵山経

『管子』は春秋斉の名宰相管仲の著作と伝えられてきたが、今日では管仲一人の手になるものではなく、戦国から漢にかけての斉国の思想を集大成したものとされる。その内容は政治・経済・軍事など多方面に亘るが、中でも『管子』後半を占める「輕重」諸篇では、山林藪沢から出る金属や樹木、珠などの資源の確保が経済振興のために重要であることや、山林を君主の管理下に置いて嚴重に監視すべきであることを繰り返し説いている。

たとえば乘馬篇では

地之不可食者、山之無木者、百而當一。涸澤、百而當一。地之無草木者、百而當一。……

地の食うべからざる者、山の木無き者は、百にして一を當つ。涸沢は、百にして一を當つ。地の草木無き者は、百にして一を當つ。……

と、土地の種類ごとにそれに見合った税をかけることを説く。越智重明氏はこれを、諸侯が山沢の樹木を売つたり、獸を捕つたりすることを認めて、それに課税するようになったことの反映と見ている¹⁶。

また地数篇には管仲が黄帝と伯高の間答を引きながら桓公に答えた言葉として

黄帝問於伯高曰、「吾欲陶天下而以爲一家、爲之有道乎。」伯高對曰、「請刈其堯而樹之吾、謹逃其蚤牙、則天下可陶而爲一家。」黄帝曰、「此若言可得聞乎。」伯高對曰、「上有丹沙者、下有黃金。上有慈石者、下有銅金。上有陵石者、下有鉛錫赤銅。上有赭者、下有鐵。」此山之見榮者也。苟山之見其榮者、君謹封而祭之、距封十里而爲一壇、是則使乘者下行、行者趨、若犯令者罪死不赦。然則與折取之遠矣。修教十年、而葛盧之山發而出水、金從之。……

黄帝 伯高に問いて曰く、「吾 天下を陶して以て一家と為さんと欲す、之を為すに道有るか」と。伯高 対えて曰く、「請う 其の堯を刈りて之に吾（五穀）¹⁷を樹え、謹みて其の蚤牙を逃るれば、則ち天下 陶して一家と為すべし」と。黄帝曰く、「此の若の言は聞くを

得べきか」と。伯高 対えて曰く、「上に丹沙有る者は、下に黄金有り。上に慈（磁）石有る者は、下に銅金有り。上に陵石有る者は、下に鉛・錫・赤銅有り。上に赭有る者は、下に鉄有り。此れ山の榮を見ず者なり。苟くも山の其の榮を見ず者は、君 謹み封じて之を祭り、封を距つること十里にして一壇を為し、是れ則ち乗る者をして下りて行き、行く者をして趨らしめ、若し令を犯す者あれば罪死して赦さず。然らば則ち之を折取るに与いて遠し」と。教えを修むること十年、而して葛盧の山 発して水を出だし、金 之に従う。……と云い、どの山にどのような鉱産資源があるかの見分け方が披瀝され、しかも資源の豊かな山が見つかったら、それを封じて祭祀を行うことも勧めている。

『管子』の経済思想を説く諸篇は、その書かれた時代が広範囲に亘っているが、金谷治氏は前半の「経言」諸篇には貨幣についての言及がなく、国家統制を柱とした素朴なものであり、『孟子』などとの対比から戦国初期のものであるのに対し、『輕重』諸篇は貨幣経済の発展をうかがわせる記述が多いことから、戦国末期のものとしている¹⁸⁾。『管子』では牧民・権修などの諸篇で説かれる重農思想が経済思想の根幹をなしているが、牧民篇では重農のためにはまず「天時」と「地利」が重要であると説かれ、山林藪沢を君主が管理することや、水利や水防への配慮もその一環と見られる¹⁹⁾。「輕重」諸篇の成書は比較的晩期であるとしても、そこで説かれる山林藪沢の国家管理の考えはそれ以前からあったものと見てよからう。

ところで前章で見た五蔵山経の中核をなす部分では、山ごとに鉱産資源の種類が記され、その筆法もたとえば（訓読は略す）

西南三百八十里、曰皐塗之山、蓄水出焉、西流注于諸資之水、塗水出焉、南流注于集獲之水。其陽多丹粟、其陰多銀・黄金、其上多桂木。（西山経16）

西二百五十里、曰駟山、是鎔于西海、無草木、多玉。淒水出焉、西流注于海、其中多采石・黄金、多丹粟。（西山経19）

中次三經黃山之首、曰敖岸之山、其陽多璵琇之玉、其陰多赭・黄金。（中次三経1）

東一百五十里、曰夫夫之山、其上多黄金、其下多青雄黃、其木多桑楮、其草多竹・雞鼓。（中次十二経6）

又西七十里、曰踰次之山、漆水出焉、北流注于渭。其上多檇櫜、其下多竹箭、其陰多赤銅、其陽多嬰垣之玉。(西山經10)

又北二百五十里、曰求如之山、其上多銅、其下多玉、無草木。滑水出焉、而西流注于諸皐之水。(北山經2)

又東南十里、曰蠱尾之山、多礪石・赤銅、龍餘之水出焉、而東南流注于洛。(中次五經13)

又西七十里、曰英山、其上多柎櫜、其陰多鐵、其陽多赤金。禺水出焉、北流注于招水、其中多鮮魚、其狀如鼈、其音如羊。其陽多箭筈、其獸多牝牛・羝羊。(西山經7)

東北百里、曰荊山、其陰多鐵、其陽多赤金、其中多犛牛、多豹虎、其木多松柏、其草多竹、多橘藟。漳水出焉、而東南流注于睢、其中多黃金、多鮫魚。其獸多閭麋。(中次八經2)

又西五十里、曰虎尾之山、其木多椒楮、多封石、其陽多赤金、其陰多鐵。(中次十經2)

の如く、伯高の「上有丹沙者、下有黃金。上有慈石者、下有銅金。上有陵石者、下有鉛錫赤銅。上有楮者、下有鐵。」という言葉に似ており、その組み合わせも、類似するものを右の引用の傍点部分に見出すことができる。また「無水」「無草木」という記述が随所に見られるのも、乗馬篇で土地を「無木者」「涸澤」「無草木者」と分類するのと軌を一にしている。ただ五蔵山経では動植物・鉱物の所在を示すだけであるが、地数篇の伯高の言葉は「其上」と「其下」にあるものの間が関連づけられており、より整理が進んだものであると考えられる。

さらに各山系の末尾には山岳祭祀に用いる品物の種類も記され、あたかも伯高が鉱産の豊かな山を祀るよう勧めていたことの裏付けとなるような記述である。これらの情報は、乗馬篇や地数篇で説かれる政策を実施するために必要な知識の源泉となっていたのではなからうか。かく見てくると、五蔵山経の中核部分の情報を利用しては、必ずしも巫祝だけでは断定できなくなってくる。山川薺沢の国家管理を唱える管仲学派も、この「五蔵山経的知識」を持っていたからこそ、それを国家が独占して経済的基盤とする重要性を知り得たのであろう。

但し「五蔵山経的知識」を管仲学派自らが山川に分け入って入手したものとするのは早計である。『抱朴子』登涉篇に

山無大小、皆有神靈、山大則神大、山小則神小也。入山而無術、必有患害。或被疾病及傷刺、及驚怖不安、或見光影、或聞異聲。或令大木不風、而自摧折、巖石無故而自墮落、打擊煞人。或令人迷惑驚走、墮落坑谷、或令人遭虎狼毒蟲犯人。不可輕入山也。

山には大小無く、皆な神靈有り、山 大なれば則ち神も大にして、山 小なれば則ち神も小なり。山に入りて術無ければ、必ず患害有らん。或いは疾病及び傷刺を被り、及び驚怖して安からず、或いは光影を見、或いは異声を聞かん。或いは大木をして風あらずして自ら摧折せしめ、巖石 故無くして自ら墮落し、打撃して人を煞ころさん。或いは人をして迷惑驚走し、坑谷に墮落せしめ、或いは人をして虎狼毒虫に遭わしめ人を犯さん。軽がるしく山に入るべからざるなり。

と云う通り、山に入る前には必ず祭祀を捧げるといふ風習は、ずっと後の時代まで続いていた。恐らく戦国期にも、山はみだりに立ち入れる場所ではなく、巫祝が祭祀を行った後、彼らの案内がなければ入れなかったことであろう。また五蔵山経に記される山岳祭祀も、中次十経末尾に

凡首陽山之首、……其神状皆龍身而人面。其祠之、毛用一雄雞瘞、糝用五種之糝。……驪山、帝也、其祠羞酒、太牢、其合巫祝二人僎嬰一璧。

凡そ首陽山の首、……其の神の状は皆な龍身にして人面。其の之を祠するには、毛（犠牲）は一雄雞を用つて瘞うすめ、糝は五種の糝を用う。……驪山は、帝なり、其の祠は酒を羞め、太牢もてし、其れ巫祝二人を合わせて僎あわしめ、嬰（供え物）は一璧なり。

とあることから、巫祝の祭祀に由来することは疑いない。「五蔵山経的知識」も元々は巫祝が持っていた知識だったのである。

しかし巫祝は本来限られた地域で活動するものであった。『春秋公羊伝』僖公三十一年には

天子有方望之事、無所不通。諸侯山川有不在其封内者、則不祭也。

天子は方望の事有り、通ぜざる所無し。諸侯は山川の其の封内に在らざる者有れば、則ち祭らざるなり。

と云い、諸侯は封国内の山川にしか祭祀を行わなかったとしている²⁰。諸侯の山岳祭祀も自国内のものに限られていたような状態で、巫祝が国境を越えた他国の祭祀に関与する機会は、ほとんどなかったことであろう。また『史記』封禪書には漢の成立後に定められた祭祀の制度が記されるが、

天下已定、……令祝官立蚩尤之祠於長安。長安置祝官・女巫。其梁巫、祠天・地・天社・天水・房中・堂上之屬。晉巫、祠五帝・東君・雲中君・司命・巫社・巫祠・族人・先炊之屬。秦巫、祠社主、巫保、族纍之屬。荊巫、祠堂下・巫先・司命・施糜之屬。九天巫、祠九天、

皆以歲時祠宮中。其河巫祠河於臨晉、而南山巫祠南山秦中。秦中者、二世皇帝。各有時日。

天下 已に定まり、……祝官をして蚩尤の祠を長安に立てしむ。長安に祠祝官・女巫を置く。其の梁巫は、天・地・天社・天水・房中・堂上。晋巫は、五帝・東君・雲中君・司命・巫社・巫祠・族人・先炊の属を祠る。秦巫は、社主・巫保・族豊の属を祠る。荆巫は、堂下・巫先・司命・施糜の属を祠る。九天巫は、九天を祠り、皆な歳時を以て宮中に祠る。其の河巫は河を臨晉に祠り、而して南山巫は南山の秦中を祠る。秦中とは、二世皇帝なり。各々時日有り。

と云い、梁・晋・秦・荆など各地の巫や、九天巫・河巫・南山巫など祀る対象が決まっている専門の巫を長安に集め、それぞれが祀っていた神に応じて祭祀を分担させていたことがわかる。五蔵山経の祭祀記事が山系ごとにまとめられているのも、巫祝の活動がローカルなものであつたからに他ならない。そうした巫祝の持つていた山川に関する知識も、やはり彼らの活動する山系に限られたローカルなものであつたはずであり、彼ら自身がそれを「五蔵山経的知識」に集積する必要は、恐らくなかつたことであろう。「五蔵山経的知識」を集積する必要があつたのは、むしろ山川の資源を自ら管理して利用しようとする、行政側の人々であつたと考えられるのである。最初に挙げた放馬灘一号秦墓の地図も、「五蔵山経的知識」が巫祝の独占物ではなくなり、行政の実務に携わる人々にも知られるようになっていたことを裏付けるものに他ならない。

但し五蔵山経はあくまで山川や資源の位置を示すだけであり、農地や農業に関する記述は一切ない。このことも、五蔵山経は最初から管仲学派が作つたものではなく、農業には関与しなかつたであろう各地の巫祝の知識が集積されたものであることを物語つていといえよう。ところで漢代には、古えは諸侯の封国に山海を含まないものと考えられていた。『漢書』荆燕呉伝贊に

呉王擅山海之利、能薄斂、以便其衆。逆亂之萌自其子興。古者諸侯不過百里、山海不以封。蓋防此矣。

呉王は山海の利を擅にし、能く斂を薄くし、以て其の衆に便ならしむ。逆亂の萌し 其の子より興る。古者 諸侯は百里を過ぎず、山海 以て封ぜず。蓋し此を防ぐならん。

と云い、諸侯が経済力をつけて反逆に及ばないよう、山海を封地に入れなかつたとしている。しかしこれは呉楚七国の乱に懲りていた漢代の目から古代を理想化したものと見られ、実際には戦国の諸侯は山川藪沢の開発に対して課税したり、農地の開墾を進めたりしていたこ

とが、諸先学によって指摘されている。²¹「五蔵山経的知識」が集積されていた背景には、巫祝が独占していた山林の植生や鉱産に関する知識を、国家の手に移して開発を進めようとする動きがあったのである。²²

三、五蔵山経の山岳祭祀

巫祝の山川に関する知識が、山林藪沢の開発に携わる行政側の人々によって集積され、「五蔵山経的知識」として管仲学派の重農思想を下支えしていたことを、前章までで明らかにしてきたが、五蔵山経には「有○焉、……」という様式で書かれる、奇怪な形状や効能を持つ動植物も記されており、また各山系の末尾には、その山系の神と、その祭祀に用いる犠牲の種類が記されている。

まず奇怪な動植物に関する記事から見よう。

奇怪な動植物のうち、動物の効能についての記述の中にはしばしば「見則○○」という形で、「ある動物が現れると○○が起こる」という予兆を示すものが見られる。これに関しては諸先学も様々に分析を行っているが²³松田稔氏はこのような予兆の中に「大旱」「大水」「蝗」「大風」といった自然災害のほか、「兵」「恐」「土功」「放土」「敗」など、天災とは思われないものがあり、それらが為政者側からの表現ではなく、被治者の側からの表現であることを指摘し、五蔵山経の災異は民間に伝わっていた素朴な信仰に基づくものと結論づけている²⁴。

五蔵山経の災異が被治者の側からの表現であるとするのはまことに卓見であるが、これらの中には、時令思想の原始的な形とみられるものもある。たとえば東次二経・盧其之山に見える鷓鴣なる鳥は、現れるとその国に土功が多くなるといい、その姿は「如鴛鴦而人足」と云う。一見奇怪な姿のようであるが、郭璞注は「今鷓鴣足頗有似人脚形状也（今の鷓鴣 足 頗や人脚の形状に似たる有るなり）」と云い、必ずしも非現実的な鳥ではない。しかも土功は『礼記』月令に

孟夏之月……是月也、繼長增高。母有壞墮、母起土功、母發大衆（鄭玄注、爲妨蠶農之事）、母伐人樹。

孟夏の月……是の月や、長を継ぎ高を増す。壞墮有る母く、土功を起こす母く（鄭玄注、蚕農の事を妨ぐるが為なり）、大衆を発する母く、大樹を伐る母からしむ。

と云い、また玉藻にも

至于八月不雨、君不舉。年不順成、君衣布摺本。關梁不租、山澤列而不賦、土功不興、大夫不得造車馬。

八月に至りて雨ふらざれば、君は挙げず。年順成ならざれば、君布を衣て本（土の笏）を摺む。関梁租せず、山沢列りて賦せず、土功興さず、大夫車馬を造るを得ず。

と云う如く、農繁期や不作の時など農民に負担が大きいときには行わないものとされていた。睡虎地秦簡の「日書」甲種でも、「土良日（土功に良い日）」と「土忌日（土功に悪い日）」が区別して記され、特に土功を興すべきでない日にそれを犯して土功を行うと「有女喪（女の喪有り）」、「大凶、必有死者（大凶、必ず死する者有り）」といった記述も見える²⁵。つまり土功はしかるべき時期を選んで行うものだったのであり、鷺嶋は土功にふさわしい季節に出現するものだったために「見則其國多土功」と認識されていた可能性もあろう。

そもそも大規模な国家行事を行うに際して、占卜によつて実行する時期を決めることは、殷代から行われていたことであり、時令思想の発祥は多分に呪術的なものであった。それに民を苦しめないよう農繁期を避ける等の理由づけが行われるようになって、合理的な時令思想が完成されていったのであろう。『管子』にも四時篇・幼官篇など諸篇に時令思想に関する記述が見られるが、中でも度地篇は、管仲が桓公に対して「地形を度りて国を治める」要諦を説く中で、水害を治めるために季節に応じてどのように対処すべきかを述べていることが注目される。

春三月、天地乾燥、水糾列之時也。山川涸落、天氣下、地氣上、萬物交通。故事已、新事未起、草木莠生可食、寒暑調、日夜分。分之後、夜日益短、晝日益長、利以作土功之事、土乃益剛。

春三月、天地乾燥し、水糾列するの時なり。山川涸落し、天氣下り、地氣上り、万物交通す。故事已り、新事未だ起らず、草木莠生して食すべく、寒暑調い、日夜分し。分しきの後、夜は日々益々短く、昼は日々益々長く、以て土功の事を作すに利にして、土は乃ち益々剛なり。

と、春が土功に最適であることを言い、続いて夏・秋・冬はともに土功に不適であることを言った後、桓公の「非其時而敗、將何以待之（其の時に非ずして敗あれば、將た何を以てか之を待たん）」という問いに対して、日頃の備えを確実にし、年中水害が起らないようにする

ことが肝要であると説いて終わる。極めて実務的且つ合理的な理論が展開されるが、「どの獣が出現する頃にはどの労役が多くなる」という民間の伝承が統治者の側に取り込まれていったことが、そうした思想を生み出した背景にあったのかも知れない。

ところでこれらの記事は、第一章で見たように、山名＋松田氏の言う甲型の記事＋河川名＋河川の産物と続いた後に置かれるのが通例であるが、中には不自然な位置に置かれているものも散見される。たとえば

東三百里、曰鼓鍾之山、帝臺之所以觴百神也。有草焉、方莖而黃華、員葉而三成、其名曰焉酸、可以爲毒。其上多礪、其下多砥。

東三百里を、鼓鍾の山と曰い、帝台の百神を觴する所以なり。草有り、方莖にして黄なる華、員まき葉にして三成、其の名を焉酸と曰い、以て毒をおむべし。其の上は礪多く、其の下は砥多し。(中次七経2)

ここでの「其上多礪、其下多砥。」は、通常の体例からすれば「帝臺之所以觴百神也。」の直後に来て、「其」とは山を指すはずであるが、「有草焉、……」の後ろに置かれている。これでは「其」の指すものが不明瞭になる。

又北水行五百里、流沙三百里、至于洹山、其上多金玉。三桑生之、其樹皆無枝、其高百仞。百果樹生之。其下多怪蛇。

又た北に水行すること五百里、流沙三百里、洹山に至る、其の上は金玉多し。三桑之に生じ、其の樹は皆な枝無く、其の高さは百仞。

百果樹之に生ず。其の下は怪蛇多し。(北次二経15)

「其下多怪蛇」は本来ならば「其上多金玉」と対になるはずであるが、その間に「三桑生之、……」という、枝のない奇怪な桑についての説明が割り込んでいる。

又東北二百里、曰天池之山、其上無草木、多文石。有獸焉、其状如兔而鼠首、以其背飛、其名曰飛鼠。澗水出焉、潛于其下、其中多黃堊。

又た東北二百里を、天池の山と曰い、其の上は草木無く、文石多し。獸有り、其の状は兔の如くして鼠の首、其の背を以て飛び、其の名を飛鼠と曰う。澗水焉より出で、其の下に潜り、其の中は黄堊多し。(北次三経5)

川の名とその産物が「有○焉」の後ろに置かれる例は少なくないが、この例では「潛于其下」の「其下」がどこを指すのか不明瞭になってしまう。「潛于其下」という句は他にも数例あるが、たとえば

又北三百五十里、曰白沙山、廣員三百里、盡沙也、無草木鳥獸。鮪水出于其上、潛于其下、是多白玉。

又た北三百五十里を、白沙山と曰い、広員は三百里、尽く沙なり、草木鳥獸無し。鮪水 其の上に出で、其の下に潜り、是れ白玉多し。
(北次二経5)

ならば、「其下」が白沙山を指し、「潜于其下」が伏流水となることを言っているのは明らかである。北次二経5の文では「有○焉」の一文を不用意に挿入してしまったために、文意が通じにくくなっているのである。

こうしたことから見れば、「有○焉」という形で書かれる記事、即ち松田稔氏の言う丙型の記事は、もともと甲型とは別系統のものであって、これを五蔵山経の編者が一つにまとめたものであることは確実であろう。

次に祭祀記事について見てみよう。五蔵山経の各山系の末尾には、

凡西經之首、自錢來之山至于驪山、凡十九山、二千九百五十七里。華山冢也、其祠之禮、太牢。隄山神也、祠之用燭、齋百日以百犧、瘞用百瑜、湯其酒百樽、嬰以百珪百璧。其餘十七山之屬、皆毛牲用一羊祠之。燭者百草之未灰、白蓆采等純之。

凡そ西経の首、錢來の山より驪山に至るまで、凡て十九山、二千九百五十七里。華山は冢なり、其の祠の礼は、太牢なり。隄山は神なり、之を祠するには燭を用い、齋むこと百日。百犧を以てし、瘞は百瑜を用い、其の酒を湯すること百樽、嬰は百珪百璧を以てす。其の余の十七山の属は、皆な毛牲には一羊を用いて之を祠す。燭する者は百草の未だ灰ならざる、白蓆采等もて之を純す。(西山経)

の如く、山系ごとに祀られる神の種類や、祭祀に用いる犠牲や供え物の種類を細かく記す。

このような祭祀記事が巫祝の知識に由来することは前章で既に述べた通りであり、諸家ともこれを巫祝のために書かれたマニュアルと見なしている。ところが巫祝のためのマニュアルや覚書にしては、この記述はあまりに簡素すぎるという疑問がある。実用的な祭祀マニュアルならば、『儀礼』諸篇のように、あるいは『五十二病方』などの医書のように、祭祀の式次第や、唱えるべきセリフや呪文を事細かに記すはずであろう。緒言で触れたとおり、これを単に省略されたものと見なすのは不安が残るのである。この記述は巫祝の知識を記したものであるには違いないが、むしろ巫祝以外の人が用いるために記されたものと見る方が自然ではなからうか。

そもそも山林川谷に神が棲むという認識は、何も『山海経』だけに限ったことではなく、儒家の文献にもうかがうことができる。たとえば『礼記』祭法には、

山林川谷丘陵、能出雲、爲風雨、見怪物、皆曰神。

山林・川谷・丘陵は、能く雲を出し、風雨を爲し、怪物を見し、皆な神と曰う。

とあり、山は雲や風雨を産む母体であるとともに、「怪物」を出現させる母体でもあったとされていたという。そしてそれらは「神」と呼ばれたのである。五蔵山経に「有○焉、……」という形で現れ、出現すると吉祥や災禍をもたらす「怪物」も、恐らく「神」として祀られるべき存在だったのであろう。

同じ祭法篇にはまた

夫聖王之制祭祀也、法施於民則祀之、以死勤事則祀之、以勞定國則祀之、能禦大菑則祀之、能捍大患則祀之。

夫れ聖王の祭祀を制するや、民に法施すれば則ち之を祀り、死を以て事に勤むれば則ち之を祀り、勞を以て國を定むれば則ち之を祀り、能く大菑を禦げば則ち之を祀り、能く大患を捍げば則ち之を祀る。

として、民や國のために勤めた者、災害を防いだ者を國家で祀ることを云い、その後稷・后土・帝嚳・堯・舜・鯀・禹・黃帝・顓頊・契・冥・湯・文王・武王と祀るべき先王とその功績を列挙した後、

及夫日月星辰、民所瞻仰也。山林川谷丘陵、民所取材用也。非此族也、不在祀典。

夫の日月・星辰に及びては、民の瞻仰する所なり。山林・川谷・丘陵は、民の材用を取る所なり。此の族に非ざるや、祀典に在らず。と云い、先王に並んで日月・星辰や山林・川谷・丘陵も、民が仰ぎ見たり、民に資源をもたらすものであるとして、國家祭祀の対象としていたという。

かく見てくると、五蔵山経において山岳を祭祀の対象としているのも、前章で見たとおり山岳が動植物や鉱産のような材用をもたらす存在として認識されているのであれば、國家祭祀の目的にもなっていると言えるのであり、必ずしも巫祝だけのための祭祀であったとは限らなくなってくる。松田稔氏は五蔵山経の祭祀記事のうち、洛陽を中心とした山系が記される中山経の祭祀記事には、祀られる神ごとに犠牲の種類が明記され、しかも前引の中次十経末尾に「堵山、冢也、其祠之、少牢具、羞酒祠、嬰毛一璧瘞。驪山、帝也、其祠羞酒、太牢、其合巫祝二人儗、嬰一璧。」と云うように、山ごとに神の種類と、祭る犠牲の種類にリンクをつけていることから、これを「周王朝の宗教

制度の特色としての階級的差等性」によって「山神による格づけ組織化」が行われた結果であると見ている³⁵。また伊藤清司氏も戦国期の山林の乱開発がさまざまな自然災害の引き金となった結果、「村落共同体で巫祝などの聖職者を中心に営んできた各地の山沢の鬼神の祭祀を包括・拡大して、国家による山川祭祀の組織体系化が進められた」と指摘する³⁷。五蔵山経の祭祀記事が両氏の指摘の通り、巫祝のローカルな祭祀が国家祭祀へと組み込まれていく過渡期のものであるならば、それは巫祝自身のマニュアルとしてではなく、むしろ巫祝を使って祭祀を行わせる側の人のために書かれたと見た方が自然ではなからうか。祭祀を行わせる統治者が、そのお膳立てをするためには、儀式の細かな手順は必要なく、用意すべき犠牲などの種類さえ書かれていれば事足りるからである。

かくて巫祝が持つ山林資源の情報が行政側の人々に集積されるとともに、その山岳祭祀の情報もまた、巫祝を使って祭祀を行わせる側の人々に集積されていったのであり、巫祝の祭祀が国家祭祀に組み入れられていく過程の一面がここに現れているといえよう。

四、五蔵山経の成立

前章までの考察で、五蔵山経が資源としての動植物や鉱物の所在を記す記事、珍しい動植物の形状や効能を記す記事、各山系の末尾に見える、祭祀のために準備すべき犠牲や供物を記す記事の三系統に大きく分かれること、それぞれ巫祝の知識が元になってはいるものの、巫祝自身のマニュアルとしてではなく、巫祝を使って山林資源を得たり祭祀を行わせたりする側の人々のために書かれたものであることを明らかにしてきた。そしてそれらが『管子』に見える経済思想とも重なり合うものであり、管仲学派の経済知識の源泉となりうるものであったこともまた明らかになった。

では五蔵山経は最終的にどのような人々によってまとめられたのであろうか。その手がかりとなり得るのは、五蔵山経の最後に禹の言葉として付されている一文である。

禹曰、天下名山、經五千三百七十山、六萬四千五十六里、居地也。言其五臧、蓋其餘小山甚衆、不足記云。天地之東西二萬八千里、南北二萬六千里、出水之山者八千里、受水者八千里、出銅之山四百六十七、出鐵之山三千六百九十。此天地之所分壤樹穀也、戈矛之所發也、

刀鍛之所起也。能者有餘、拙者不足。封于太山、禪于梁父、七十二家、得失之數、皆在此内、是謂國用。

禹曰く、天下の名山、經すること五千三百七十山、六万四千五十六里、地に居るなり。其の五臧を言うは、蓋し其の余の小山、甚だ衆く、記すに足らざればなりと云う。天地の東西、二万八千里、南北、二万六千里、水を出だすの山なる者は八千里、水を受くる者は八千里、銅を出だすの山は四百六十七、鉄を出だすの山は三千六百九十。此れ天地の壤を分かち穀を樹うる所なり、戈矛の発する所なり、刀鍛の起る所なり。能者は余有り、拙者は足らず。太山に封じ、梁父に禪するは、七十二家、得失の數、皆な此の内に在り、是を國用と謂う。

この文の「天地之東西」以下は、『管子』地數篇にも管仲が桓公に答えた言葉として見えており、わずかな異同はあるがほぼ同文である。畢沅『山海經新校正』は「此天地之所分壤樹穀也」以下を周秦の人が加筆したものとし、郝懿行『山海經箋疏』は「禹曰」以下をすべて周人の伝えた言葉としており、前野直彬氏は「不足記云」で切ればすつきりするが、それだけなら山と距離の總計を挙げてその他は省いたと言うだけであり、わざわざ「禹曰」として書くほどのものでもない指摘する²⁰。しかし『史記』貨殖列伝正義や『太平御覽』卷三八、地部三の引く『管子』には、「出銅之山四百六十七」の前に「凡天下名山五千三百七十」という一文が見え、これが本当に『管子』の佚文ならば、「不足記云」の前後ともに一体であつて区切れないことになる。恐らくこの文は途中で区切るべきものではなく、全部が禹の言葉として認識されていたと見るのが妥当であろう。

禹は『詩經』においては小雅・信南山「信彼南山、維禹甸之（信たる彼の南山、維れ禹之を甸す）」、大雅・文王有声「豐水東流、維禹之績（豐水 東流す、維れ禹の績なり）」、大雅・韓奕「奕奕梁山、維禹甸之（奕奕たる梁山、維れ禹之を甸す）」の如く、大地の秩序を整えた神として見えており、『山海經』海外東經では

帝命豎亥、步自東極、至于西極、五億十選九千八百步。豎亥右手把算、左手指青丘北。一曰禹令豎亥。一曰五億十萬九千八百步。

帝 豎亥に命じ、歩くこと東極自りし、西極に至るまで、五億十選（万）九千八百步。豎亥 右手もて算を把り、左手もて青丘の北を指す。一に曰く禹 豎亥に令すと。一に曰く五億十萬九千八百步と。

と云う如く、禹は大地を歩測した神ともされていた。この五藏山經末尾の一文でも、大地の有り様を知り尽くした神的存在としての禹を持ち出すことで、そこに記される山林資源の情報への信憑性を高めようとする意図があつたことは想像に難くない。

いったい先秦時代の実用的な思想の書では、古代の聖王がその方面の達人である名臣に下問するという形で、その人の言葉に仮託して実用知識を記すものが多い。現存するものでは『六韜』における文王・武王と太公望、『黄帝内経』における黄帝と岐伯をはじめ、出土医書でも馬王堆漢墓帛書「十問」は、黄帝と天師・大成・曹熬・容成、堯と舜、王子巧（喬）父と彭祖、盤庚と耆老、禹と師癸といった、古帝王と臣下の問答で成り立っている。また『漢書』芸文志に見える、既に失われた数術や方伎の書でも、『黄帝雜子氣』『黄帝陰陽』『神農大幽五行』『黄帝長柳占夢』『神農教田相土耕種』『神農黃帝食禁』など、このような体裁を思わせる書名が散見される。もちろん実際に古帝王と名臣の会話を記録したとは考え難く、こうした人物を祖と仰ぐ職能集団があり、聖王の權威を借りて自らの思想や技術の確かさを宣揚しようとしたのであろう。

これらのことを考えると、地理の神としての禹を祖と仰ぎ、巫祝から得た山林資源の知識を体系化させた集団ないし学派が、五蔵山経をまとめた人物像として浮かび上がってくる。しかし全編を「禹学派」がまとめたとするのにも実は問題がある。五蔵山経には黄老学派の影響があると見られる記述も存在するのである。それは西次三経に見られる、崑崙にまつわる一連の記述である。

この部分の記述はたとえば

又西北四百二十里、曰崑山、……是有玉膏、其原沸湯湯。黄帝是食是饗。是生玄玉。玉膏所出、以灌丹木。丹木五歳、五色乃清、五味乃馨。黄帝乃取崑山之玉榮、而投之鍾山之陽。瑾瑜之玉爲良、堅粟精密、濁澤有而光。（郝懿行案、有而當爲而有）。五色發作、以和柔剛。天地鬼神、是食是饗、君子服之、以禦不祥。……

又た西北四百二十里を、崑山と曰う、……是に玉膏あり、其の原は沸湯湯たり、黄帝はれ食し是れ饗す。是に玄玉を生ず。玉膏の出づる所、以て丹木に灌ぐ。丹木は五歳にして、五色 乃ち清く、五味 乃ち馨る。黄帝乃ち崑山の玉榮を取りて、之を鍾山の陽に投ず。瑾瑜の玉を良と爲し、堅く粟のあやありて精密、濁沢にして光有り（郝懿行案するに、「有而」当に「而有」爲るべし）。五色 発し作り、以て柔剛を和す。天地鬼神、是れ食し是れ饗し、君子 之を服すれば、以て不祥を禦ぐ。……（西次三経4）

又西三百二十里、曰槐江之山。丘時之水出焉、而北流注于泑水。其中多羸母、其上多青雄黄、多藏琅玕・黄金・玉、其陽多丹粟、其陰多采黄金銀。實惟帝之平圃、神英招司之、其状馬身而人面、虎文而鳥翼、徇于四海、其音如榴（郭云、未詳）。南望昆侖、其光熊熊、其

氣魂魂。西望大澤、后稷所潛也、其中多玉、其陰多楛木之有若。北望諸岬、槐鬼離命居之、鷹鷲之所宅也。東望恆山四成、有窮鬼居之、各在一搏。爰有淫水、其清洛洛。有天神焉、其狀如牛、而八足二首馬尾、其音如勃皇、見則其邑有兵。

又た西三百二十里を、槐江の山と曰う。丘時の水焉より出でて、北流して澗水に注ぐ。其の中は羸母多く、其の上は青雄黃多く、多く琅玕・黄金・玉を蔵し、其の陽は丹粟多く、其の陰は采ある黄金と銀多し。実に惟れ帝の平圃、神英招之を司り、其の状は馬身にして人面、虎文にして鳥翼、四海に徇く、其の音は榴（郭云う、未詳）の如し。南に昆侖を望み、其の光は熊熊として、其の氣は魂魂たり。西に大沢を望み、后稷の潜む所なり、其の中は玉多く、其の陰は楛木の若（神樹の一種）有るもの多し。北は諸岬を望み、槐鬼離命之に居り、鷹鷲の宅する所なり。東に恆山四成を望み、有窮鬼之に居り、各々一つの搏に在り。爰に淫水有り、其れ清くして洛洛たり。天神有り、其の状は牛の如くして、八足二首馬尾、其の音は勃皇というが如し、見れば則ち其の邑は兵有り。（西次三経7）

の如く、宋玉「高唐賦」「神女賦」を思わせる、四字句を基調とした有韻の美文が見られ、ここに挙げた以外の条でも、不周の山や西王母など、神話や帝王説話が集中的に現れることから、五蔵山経の他の部分との異質さが諸先学によって指摘されている²⁹⁾。

ここで注意したいのは、崋山の条の有韻の部分に黄帝が現れることである。『管子』に黄老思想の影響が見られることは既に指摘されているが、そのような篇に定型押韻句が多く見られることも、鈴木達司氏によって指摘されている³⁰⁾。また同じ条の「沸沸湯湯」という語も、『淮南子』時則篇に「荝荝陽陽」という語が見えるほか、馬王堆帛書『老子』乙本卷前古逸書・経・兵容にも「荝荝陽陽、因民之力、逆天之極、有重有功、其國家以危、社稷以匡、事无成功。（荝荝陽陽として、民の力に因り、天の極みに逆らい、有（又）た重ねて功有れば、其の國家は以て危うく、社稷は以て匡け、事は成功無し³¹⁾。」とあり、黄老学派の文献との表現の近さを感じさせる。西次三経に黄老学派の手が入っている可能性は十分考えられよう。

しかし黄老学派の影響はあくまで西次三経にとどまるものであり、五蔵山経の主要な部分はやはり「禹学派」の手になるものと見るのが妥当であろう。そうすると五蔵山経は「禹学派」と黄老学派の思想が交錯する場所で成立したと考えられるのであり、管仲学派の経済思想とも重なり合うことからすれば、その場所としては齊の稷下がふさわしいのではなからうか。

論者の中には五蔵山経の成立場所を洛陽と考える者も少なくない。中山経には洛陽近辺の山が記され、その記述が最も細かいことがその

最大の根拠であり、たとえば小南一郎氏は「南方的な要素や東方的な要素が一つに纏められているのも、南方や東方の現地でこの書物が成立したのではなく、多様な要素を一つに纏められるセンターがあったことを示唆しよう。そうしたセンターとしては、やはり東周の都があった洛陽を想定するのが最も可能性が高いであろう」と云う³²。

しかしこうしたセンターとなり得る場所は、必ずしも洛陽に限るものではない。『管子』小匡篇に

今夫商群萃而州處、觀凶飢、審國變、察其四時、而監其鄉之貨、以知其市之賈、負任擔荷。服牛輅馬以周四方、料多少、計貴賤、以其所有、易其所無、買賤鬻貴。是以羽旄不求而至、竹箭有餘於國、奇怪時來、珍異物聚。

今夫の商 群萃して州処し、凶飢を觀、國變を審らかにし、其の四時を察し、而して其の郷の貨を監、以て其の市の賈を知り、任を負い荷を担う。牛に服し馬に輅りて以て四方を周り、多少を料り、貴賤を計り、其の有る所を以て、其の無き所を易え、賤き^{やす}に買い貴き^{たか}に鬻ぐ。是を以て羽旄は求めずして至り、竹箭は国に余り有り、奇怪 時に來たり、珍異なる物聚まる。

と云い、商業の発達した斉国の状況を反映したものと見られる。また戦国末期のものとされる地数篇でも、管仲が交易による経済振興策を桓公に説いた後で「夫齊衢處之本、通達所出也、游子勝商之所道（夫れ齊は衢処の本、通達して出ざる所なり、游子勝商の道とする所）」と云う。少なくとも稷下の学が機能していた頃には、齊は各国の遊説の土が集まる地であるとともに、交易通商の要衝でもあり、商旅の人々を通じて各地の文化が交錯する地であった。このような状況はどの地に何を産するということ「五蔵山経的知識」への需要を拡大することにもつながったであろうし、稷下学士の中にもそうした知識に目を向ける者がいたことは想像に難くない。

加えて五蔵山経に描かれる山系は、そのほとんどが河水・渭水・洛水・漢水の流域に位置している³³。これらの川を下っていけば、漢水を除いて齊の疆域に到達するのであり、齊はいわば河川を通じて五蔵の山々の要を握る位置に当たることになる。

こうした状況に、前章まで述べ来たったことを考え合わせれば、五蔵山経の成立に斉国や稷下の学の介在を考えないわけにはいかないと思われるのである。

結語

これまで述べ来たったことを要約すれば、五蔵山経の記事は

(一)「多○○」「其上有○○、其下有○○」「其陰多○○、其陽多○○」「無草木」「無水」等の書式で書かれる、ありふれた動植物や鉱物の所在を示す記事

(二)「有○焉、其状……(形状の説明)、見則……(吉祥・災異の予言)」あるいは「食已○○(病気)」等の形式で書かれる、奇怪な動物の形状や効能を説明する記事

(三)各山系の末尾に置かれる、山系ごとの神の種類と、祭祀に必要な犠牲や供物の種類を示す記事

に分かれる。このうち(一)はほぼすべての条に見られ、五蔵山経の最も中核をなす情報と考えられる。これらは山沢から「材用」を得ようとする行政側の人間に有用な情報であり、『管子』の経済思想にとって必要な知識の源泉となつたと思われる。(二)は非現実的な形状や効能を持つものの他に、土功など人事に関する災異の予兆となるものもあり、『管子』をはじめ諸書に見られる時令思想の原始的な形もうかがえる。(三)は巫祝のためのマニュアルであるなら当然必要な、祭祀の細かな手順や唱えるべき呪文の記載がなく、むしろ巫祝を使って祭祀を行わせる統治者のための情報であると見られる。

こうしたことから、五蔵山経は巫祝の情報がもとになつていても、巫祝自身が用いるために書かれたものとは認め難い。巫祝を利用して山沢の材用を得ようとしたり、そのために祭祀を行わせようとしたりする統治者の利用に供するために、巫祝のもたらした情報を集積したものと考えられるのである。その編者として想定されるのは、禹を祖と仰いで、巫祝から得た山林資源の知識を体系化させた集団ないし学派である。

五蔵山経の情報は管仲学派の経済思想に必要な情報と重なり合うものがあり、五蔵山経末尾の「禹曰」で始まる一文とほぼ同様の文が『管子』地数篇にもあることから、「禹学派」と管仲学派に交渉があつたことは確実である。また西次三経の記述は崑崙や西王母、黄帝など神話的な記述が集中することから、他との異質さが指摘されているが、この記述の中は黄老学派の文献に多く見られる定型有韻文と同様の韻

文が見られることから、黄老学派の影響もあったものと思われる。

ところで五藏山経が記しているのは、山沢の現況である。各山ごとに何がいて何を産するという現況を書き連ねるだけであって、それをどう用いるべきか、危険な動物にどう対処すべきかというものは一切説かれない。一方で『管子』はそこからさらに進んで、山林資源を活用して富国強兵に役立てることを説いたり、地味にふさわしい植林をするなど自然の開発と改造による農林業振興を説いたりしている³⁴。つまり五藏山経はただ情報を羅列するだけであって、それ自体が何らかの思想を説いているわけではないのである。

それにもかかわらず五藏山経は伝世文献として我々の眼前に残り得た。一方で馬王堆漢墓帛書の多くの医書や、睡虎地・放馬灘など各地で出土した日書のように、極めて特殊な職能の人しか使えないような書物の多くは、伝世文献としては残らなかった。『漢志』にはこのような狭い用途の実用書の名がまだ多く残っているが、そのほとんどは後世に伝わらず、残ったのは『孫子』や『黄帝内経』のような、根本的かつ普遍的な思想や理念を持つ書物であった。マニュアルの実用書はその知識や技術が古くなれば、当然用済みになって顧みられなくなり、散佚する運命にあつたのである。五藏山経もし単なる巫祝用のマニュアルであつたとしたら、後世には残り得なかつたのではなからうか。極めて限られた人のための実用書ではなかつたからこそ残り得たのであつて、管仲学派の経済思想の源泉となるなど、実用のために編まれながら実用書を超えた価値があると認識されていたのである。

ではこのような価値を持つとされた書が、いかにして漢の司馬遷に「余敢えて之を言わず³⁵」と退けられる運命に立ち至つたのか、そして五藏山経の編者として想定した「禹学派」の実態、またその消長の経緯はいかなるものであつたかという問題が生ずるが、これらについては稿を改めて考えることとしたい。

注

- 1 前野直彬『山海経・列仙伝』解説、集英社全釈漢文大系33、一九七五年、一一～一二頁
- 2 魯迅『中国小説史略』第二編「神話與傳説」、『魯迅全集』第九卷、人民文学出版社、一九八一年、一八～一九頁
- 3 伊藤清司「古代中国の民間医療——『山海経』の研究(三)」、『史学』四三卷四号、一九七二年
- 4 前野直彬、前掲書
- 5 松田稔『山海経』の基礎的研究、笠間書院、一九九五年、一一二頁
- 6 釈文・訓読は山田慶児『新発現中国科学史資料の研究 訳注篇』(京都大学人文科学研究所、一九八五年)及び小曾戸洋・長谷部英二・町泉寿郎『五十二病方』(東方書店「馬王堆出土文献訳注叢書」、二〇〇七年)による。
- 7 大形徹『山海経』の「山経」にみえる薬物と治療、『中国古代養生思想の総合的研究』、平河出版社、一九八八年所収、三一頁
- 8 松田稔、前掲書、一一四頁
- 9 松田稔、前掲書、一二四～一二五頁
- 10 『山海経』が『漢書』芸文志で形法家に分類され、『隋書』経籍志では史部・地理類、『四庫全書総目提要』では子部・小説家類に分類されることも、内容の雑多さや性格のつかみにくさを物語っている。
- 11 松田稔、前掲書、第二章第二節
- 12 甘肅省文物考古研究所「甘肅天水放馬灘戦国秦漢墓群の発掘」、『文物』一九八九年第二期所収、文物出版社、一〇～一一頁
- 13 何双全氏はこの地図を軍用地図であったとするが(天水放馬灘秦墓出土地図初探、『文物』一九八九年第二期所収、文物出版社、二〇頁)、そこに描かれる行政区画や森林分布に軍事とのかかわりは窺いにくい上に、漢初の馬王堆漢墓出土の「駐軍図」に見える、駐軍や要塞の位置、集落の戸数のような軍事上重要な情報を欠いており、軍用地図と断定するには決め手を欠く。
- 14 『後漢書』循吏伝・王景
- 15 「七年、丹矢傷人垣離里、中画、自刺矣。棄之于市、三日、葬之垣離南門外。三年、丹而復生」(何双全「天水放馬灘秦簡綜述」、『文物』一九八九年第二期所収、文物出版社、二八頁)
- 16 越智重明「山林敷沢と諸侯の社」、『戦国秦漢史研究』I、中国書店、一九八八年所収、一二三～一二三頁
- 17 孫詒讓は「吾」を「五」の誤りとし、下に「穀」字を脱するとする。『札埭』卷四。
- 18 金谷治『管子の研究』、岩波書店、一九八七年、一四一～一四九頁
- 19 金谷治、前掲書、一二〇～一二二頁
- 20 もっとも実際にはこれに当てはまらない例もあったようである。『春秋左氏伝』哀公六年には

- 初、昭王有疾。卜曰「河爲祟。」王弗祭。大夫請祭諸郊。王曰「三代命祀，祭不越望。江・漢・睢・漳，楚之望也。禍福之至，不是過也。不穀雖不徳，河非所獲罪也。」遂弗祭。
- 初め、(楚の)昭王 疾有り。卜曰く「河 祟りを為す」と。王 祭らず。大夫 諸を郊に祭らんことを請う。王曰く「三代 祀を命ずるに、祭は望を越えず。江・漢・睢・漳は、楚の望なり。禍福の至るは、是を過ぎざるなり。不穀 徳あらずと雖も、河は罪を獲る所に非ざるなり」と。遂に祭らず。と云い、楚の昭王は楚の望を越えて黄河を祀ることをしなかつたが、望を越えて祭祀を行う者がいたことが、この話の下敷きになっているのであろう。
- 21 増淵龍夫 『中国古代の社会と国家』、弘文堂、一九六〇年。また越智重明、前掲論文第一節など。
- 22 森和氏はローカルな巫祝の持っていた「五蔵山経的知識」が集積された要因として、各地の巫祝が一堂に会する機会があつたと推定する(森和『山海経』五蔵山経の世界構造、『史滴』22、二〇〇〇年)。しかし現時点ではそのようなことが行われた確かな根拠は見当たらず、仮説の域を出るものではない。
- 23 神田喜一郎 『山海経』より観たる支那古代の山岳崇拜、『支那学』第二巻第五号、一九三二年。また松田稔、前掲書、第四章第一節。
- 24 松田稔、前掲書、三六四〜三六五頁
- 25 釈文は『睡虎地秦墓竹簡』(文物出版社、一九九〇年)による。
- 26 松田稔、前掲書、第三章第五節
- 27 伊藤清司 『中国の神獣・悪鬼たち』、東方書店、一九八六年、二二七頁
- 28 前野直彬、前掲書、三八一頁
- 29 高馬三良 『抱朴子 列仙伝・神仙伝・山海経』解説、平凡社「中国の古典」四、一九七三年。松岡正子 『山海経』西次三経と羌族——昆侖之丘と羌の雪山について、『中国文学研究』第12期、一九八六年など。
- 30 鈴木達司 『道』のための有韻文、『東方学』第百十五輯、二〇〇八年、三〇〜三一頁
- 31 釈文・訓読は『馬王堆漢墓帛書 経法』(文物出版社、一九七六年)及び澤田多喜男『黄帝四経』(知泉書院、二〇〇六年)による。
- 32 小南一郎 『山海経』研究の現状と課題、『中国——社会と文化』第二号、一九八七年
- 33 森和氏前掲論文に、山系ごとの位置図がまとめられている。
- 34 『管子』地員篇は地味を分類してそれに応じた植生を述べており、原宗子『古代中国の環境と開発』(研文出版、一九九四年)で詳しい分析が行われている。
- 35 『史記』大宛列伝賛